

---

# 水田

増田朋美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水田

### 【Nコード】

N0316A

### 【作者名】

増田朋美

### 【あらすじ】

本文を読めばすぐわかると思います。大変短い話なので、説明はしなくてもよいでしょう。実にくだらないと、思われる方もいらっしゃると思います。

## 前編

その一

慥は、毎朝犬の散歩でその道を通っていました。左右を水田に囲まれた美しい道でした。それゆえ自動車も少ないので、片足の不自由な彼でも楽に歩くことができました。慥は、さやさやと風になびく稲の音を、聞きながら歩くのが好きでした。その道は、大通りに通ずる交差点へ繋がっていました。その交差点に一番近い水田には、小さなばあさんが、昔ながらの鎌を持って、草刈をしていました。以前はこのばあさんに挨拶すらできなかった慥でしたが、今は犬の方が「わんわん」と話し掛けてしまうので、「ご精が出ますね。」とだけ話すようになりました。

「一生懸命毎日を大事に過ごしている人がいるんだな。」と、彼は言いました。

慥が通った後、今度はみつつが、やはり犬を連れてやってきました。ばあさんに会うとすぐに、「おう、ばあちゃん、今年の米の出来映えはどよ。」と聴きました。ばあさんも巻けじと「上等、上等！」と、答えました。「じゃあ今年もでぶさんがいっぱいできるかな！」と、みつつは冗談をいいました。彼と仲良しの悠三も、このばあさんが野良仕事をしているのを、興味深そうに眺めていました。

一方、増田家では深刻な問題が起こっていました。分家増田家の次女美菜子が、全く食事に手を触れなくなつたのです。どういう経緯でそうなつたのかは何もわかっていません。本家増田家に属する真矢は、「女の子ってなんて余計なことに終始するんだろう。」と、首をひねっております。

ところが、あるときから、その水田が、草ぼうぼうになりました。それが段段ひどくなり、草が伸び放題になって、遂には稲の背丈を通り越してしまいました。水田はまるで海のように、雑草は島のようでした。

直人たちは、夏休みの恒例で、悠三の家に来ていました。

「今年の夏は問題が一杯だ。少しも楽しくなんか無いわ。美菜子ちゃん、拒食症になって、真矢君の家は滅茶苦茶でしょう。」と、直人がいいました。

「飯を食わないなんて信じられない。よく平気だな。僕なんか、一食抜いても命取りだ。」とみつつが言いました。

「そつだよ。しかもそれは、懐ちゃんみたいに生まれつき小食という訳ではなくて、本人の意思でご飯を食べないって所に問題があるわけだ。」と、真矢。

「飯を馬鹿にしてるのやるか、つまり、飯を食うってことが、楽しいものじゃなくて、何か罪深いものになっちゃったということやる。絶対何か訳が無きゃ、そうはならんよ。」と、悠三が言いました。「君はどう思う、懐ちゃん。」

「悠三の言う通りじゃけ、何もいうことはなか。」と、懐は言いました。

「それを言っちゃ御仕舞いやん、そやからあかんのや。何とかして、

解決せなあかん。」

「どうしてそう思うんじゃ。」

「だって、人が困つてるとき、放つとくやつがあるか。僕は、美菜子ちゃんには散々お世話になつてもろたけん、その彼女がいま、困つてるんよ。助けなあかんとちゃう?」

「じゃあばつて(しかし、)あんたと美菜子と、どう言う関係がある?なんも関係が無いのにいちいち手を出しよつたら、かえつて迷惑になると思う。そうじゃろ。」

「もう、二人とも、違う訛りで口げんかしなくてももらえないかな!こっちは大阪で、もう一方は広島で。意味が全然とれないよ!」とみつつがとめました。

悠三と慥はそれぞれ再従兄弟にあたり、二人とも出身地が異なっていました。柚木家は全国津々浦々にある、大地主でした。金銭的に余裕のある家系でしたから、真正面に感情を表すことが許されていたのです。しかし、慥の家は没落し、悠三の家は繁栄していました。

「話を戻しましょう。あたし達は美菜子ちゃんに対してどう付き合つたらいいかを話し合いに来たんでしょ、今日は。」と、直人が言いました。

「そうやった。で、真矢君、美菜子ちゃんは、ほんとに何にもたべんのか。」と、悠三。

「うん。特に、肉とご飯を食べないんだ。」

「はあ。贅沢なこつた。にくも飯も作るのはすごく大変だよ。ほら、大藪のおばあちゃんだってそうだ。いつもいつも草刈して。ああしないよ、めしはできないよ。」

と、みつつがあきれた顔でいいました。

「大藪のおばあちゃんいなくなっちゃったよ。」と、一番のちび介ノブがいました。ノブはまだ幼すぎて、他の人達の話はとも理解できませんから、今まで黙っていたのですが、「大藪のおばあちゃん」の名前が出たので、ぱっと口に出したのです。

「いなくなっただって？」と、悠三が繰り返しました。

「いつごろから。」と、真矢がききました。

「とにかくいないの。田んぼは草ぼうぼう。」

「とすると、二週間、いやもつと前からか？あそこへ出ていないと言っことやな。そのへんに、あの道を通った人いる？」と、悠三が言いました。

「そのときはまだいらっしやったよ。」と、慥が言いました。

「どんなようすやった？」

「べつにかわったことはなか。あぜ道に腰をおろして、何か考えとったよ。僕が通りかかったら、『やあ慥ちゃんおはようさん』て仰つて。それから、『このごろ田んぼをやるのは大変になってきたよ。』と、仰っていた。」

「それでなんともおもわなかつたんか。」

「ああ。いつもと変わらん毎日じゃと思って。」

「馬鹿者！」と、悠三は怒って言いました。「その言葉から何にも気づかなかつたんかい。鈍いなあ。それはきつと宣言文だつたんやで。もう駄目だつて言う意味の。それでなんの言葉も掛けてこなかつたんか。」

「悠三、そう興奮したらいいけん。そんな事言つてどうするんよ、なんの効き目もありはしないんじゃ。僕だつて少しは、もう終わつてしまつんだ、とは感じたよ。でも、口にだしたつて仕方ないんじゃ。僕らが関与することないんよ。」

「ほんとに、にぶいんやねえ！僕時々わからんときあるんや。慥ちゃんみたいな人つて、頭では考えるくせに、絶対実行せんのか。人のうわさばかりして、実際にはその通りにせんのか！慥ちゃんつてだめなやつやね！一々変なものをお絵かきして、過去のこと消そう消そうしてるから、そうなるんとちゃう？」

「ゆっぴ、これは慥ちゃんのほうが正しいと思うよ。確かにかわいそうとは思つけど、いざ何かしようと思つたら、既に持つていたいるんな物を捨てなきゃいけないんだよ。皆そうなるのは嫌だから、何にもしないんだよ。ゆっぴは、それでも全部捨てられる？」

「ああ、その覚悟もあるね！」

「真矢君、放つておけばいいんじゃ。悠三はまだ無知なんじゃ。まだ硬い殻の外に出たことなか、一度出れば判るようになる。」と、慥が言いました。

「ねえねえ、それよりも美奈子ちゃんどうするの？なんだか、話はずれてしまつたわ。元に戻さなきゃ。」

「そうやね。どうしたらいいんやろ。」「こつやつてすぐ切り替えができることも悠三の特技でした。」

「美菜子ちゃんがもし誰かに悩みを聞いてもらいたがつたら聴いてあげて、それ以外はあんまり干渉しない方がよいね。慥ちゃんの話

にもあつたけど、かえって迷惑かもしれないから。」とみつつが言いました。これで決着がつき、後は美菜子がこんなことをして来た場合どうするかということ話し合つて総会は終わりました。みなそれぞれの家に帰りました。しかし、直人は家に帰る途中、ずっと考えていました。彼女は、悠三と慥の喧嘩が強烈に頭に残っていました。

「私に、捨てなきゃいけないものってあるかしら。」と、彼女は言いました。「何も無いわ。私が何一つ持っていないんだから。あの人は、根本的に他の人と関わりたくないんじゃないかしら。慥ちゃんなんか特に。あの人は今までのく人と付き合っていないんだから。ほんとに駄目な人ね。ゆっぴの言うとおりだわ。あの人は世の中は悪いものって勝手に決め付けて、それを押し込んでいるだけじゃないの！でも、私はそうはしないわ。絶対に！」



## 後編

それに、

直人は、数日後、分家増田家に行きました。一つの計略を練つたためでした。悠三も賛成してくれて、ほかの人たちにはわからないように実行することにしました。

戸を強く叩くと、骨の上に布を貼り付けたようにしか見えないほど、やせた美菜子が出てきました。

「やあ美菜子。」と、直人が言いました。「ちよつといらつしやいよ！」そういつて美菜子の棒みたいな腕を引つ張り、例の水田へ連れて行きました。

「見て御覧なさい！草ぼうぼうでしょ！今から草刈をするんだけど、人が足りないから、あんたに手伝つてほしいの。ただ、穂がたらんと下がってる草は絶対取らないでもらえる？後は全部刈つて。」と、美菜子に草刈鎌を渡して、自分はせつせと草刈をはじめました。美菜子はしぶしぶ直人の後に付いて行きました。直人は美菜子の手付きを見ながら、きちんとした鎌の動かし方を教えました。美菜子はぎこちなくも、すぐ枯れるようになりました。

この水田は大変広いので、二時間だけでは、全部の草を刈ることなどできませんでした。それほど草ぼうぼうだったので。穂がたれている草は残しました。

「あーあ、暑い日差しの下で働くお腹が減る！」と、直人は言いました。するとそこへ悠三がやってきて、「おーい御苦労さん、アイス買ってきたけん、食ってくれ。」と、威勢良く言いながらやってきました。そしてクーラーボックスをあけて、蜜柑アイスキャンデーを二本出しました。直人はすぐかぶりつきました。美奈子は、ちよつと躊躇いましたが、それでも何とか食べることができました。その次の日も、直人は美菜子を草刈に誘いました。草刈が一応終わると、悠三が食べるものを持ってきました。それもアイスキャ

ンデーから、お結びに変わりました。お結びをみて、美菜子は戸惑った顔をしました。彼女はお結びに手をつけませんでした。そして草刈を続けました。しかし、30度以上の夏の暑さ、美菜子は疲れて動けなくなっていました。すると、目の前に大きなお結びがだされて、「ほら食べるや。このままだと動けなくなつて家にも帰れなくなつちまうねん。くいものつてのは、もともとそのためにあるねん。なくなった力を補給するためにな。何にも悪いことじやなか。」と、悠三が言いました。美菜子は思い切ってお結びにかぶりつきました。そして立ちあがろうとしました、と、どうでしょう、よろよろ、ではなく、さつと立ちあがることができました。「さて、続きやるな。」と、悠三たちは別に喜びもせず、再び草刈に取りかかりました。美菜子も取りかかりました。ちようどそこへ、みつつが通りかかりました。「何してるの君達。」と、みつつは水田に入ってきました。「美菜子ちゃんもいるね。」「おう、大藪のおばあちゃんが不在の間、稲の世話をしておかないと、米が駄目になつちまうやる。だから草刈や。」と、悠三が言いました。「驚いたなあ、ほんとにやってるよ。真矢君に知らせてくる。」と、みつつは本家へすつ飛んでいって、真矢と一緒に戻ってきました。「僕らも草刈手伝うよ。」と、真矢とみつつはそれぞれ鎌を取って、草刈を始めました。人数が増えたので、余分な草はすべて取り払われました。次は農薬の散布に取りかかりました。稲がほいもちにかかるといけないからです。その次はCDをつるして鳥よけを作ったり、竹で稲刈り用の馬を作りました。そんなあるとき、「お姉ちゃんお昼！」と、ちびのノブの声がして、いつ来たのかと思つたら、懐が一緒に立っていて、重箱を下げていました。「なんだ、来たのか。」と、悠三は馬鹿にしたように言いました。「お昼に結び持ってきた。」と、懐はいいました。「どっちにする、僕は彫り物と、こういうことしかできんよ。」「ありがとう懐ちゃん。」と、みつつが言いました。悠三は顔を赤くしたまま、何にも言いませんでした。この日から、懐が昼飯をもって現れるよ

うになりました。　　そうこうしているうちに、稲の穂は茶色になり、悠三たちは稲刈りをしました。このころは、美菜子もお結びをよく食べるようになりました。そして一週間たって稲払いを行い、洗米をして、白い米にしました。そのとき、あの、大藪のおばあちゃんが現れました。おばあちゃんは稲払いが既にできているのを見て、とても喜び、嬉しさで泣きました。全員おばあちゃんの家を待ってもらい、巨大なお結びをつくって皆顔をご飯粒だらけにしました。美菜子も顔中ご飯粒だらけでした。　　「なあ、美菜子ちゃん、」と、悠三が言いました。「飯を食うって楽しいだろ。」　　美菜子は笑って頷きました。直人たちに丁寧な礼を言いました。直人たちもまた、美菜子が回復したのを喜びました。　　それを最期として、水田はもう稲を植えられることはありませんでした。あの道も消滅してしまいました。これをとめることは直人も悠三もできませんでした。巨大なパワーシヨベルがやってきたとき、直人と悠三は「自分達は何もできない」とはどう言うことなのか、よくわかりました。「すくなくとも、飯のありがたさだけは知っているよ」と、美菜子が励ましてくれたことで立ち直りました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0316a/>

---

水田

2010年10月10日12時27分発行